

中英語期における文法性のゆれに関する一考察

—Lazamon's *Brut* を資料として—

田 中 敦 子

0. はじめに

本稿の目的は、初期中期英語（1200年頃）で書かれた作品 *Lazamon's Brut*¹ のテキスト MS. Cotton Caligula A. ix における文法性（以下単に「性」とする）の「ゆれ」が、性消失に影響するかについて検証し、英語における性消失の実態を確認し、その原因について考察することにある。

古英語期²において名詞は、性、数、格という文法範疇を有し、性は、名詞そのものや名詞と一致する形容詞、限定詞、代名詞の曲用によって示されていた³。しかし、初期中英語期においては屈折語尾の水平化 (levelling)⁴ が徐々に進み、限定詞および名詞の屈折語尾は、人称代名詞に比べて、性および格が判別し難くなった。そして、現代英語において限定詞、名詞の屈折語尾は性を表示せず、人称代名詞だけが性を示している。

Baron (1971: 126) は、*Lazamon's Brut* において女性名詞 *burh* (=borough, castle, town) の性が男性に変移する場合と、古英語期以来の女性を維持する場合があることを、限定詞を手掛かりに指摘している。名詞 *burh* とこの名詞に照応している人称代名詞の間のテキストを観察する時、*burh* の限定詞と人称代名詞の性の間に「ゆれ」が見られるのである。本稿では、それ故、本来はそれぞれ男性及び女性を示す名詞にどの性を持つ人称代名詞が照応しているのか、名詞と人称代名詞、限定詞との間に性の「ゆれ」が存在するかどうかを調査してみたい。さらに人称代名詞 *hine* や *hire* と、それに照応する名詞を修飾する限定詞の屈折語尾との関係についても考察する。

1. 先行研究における仮説

1.1. 性変移仮説

Hoffmann (1909) によれば、*Lazamon's Brut* では、古英語期における性（以後「元の性」とする）が保持されている名詞も多いとされている。しかし、その一方で、水平化により語尾音節が弱化して、性が消失していったと考えている。さらに、多くの名詞が性変移 (Genuswechsel) を起こしたとする仮説を立てた。この性変移の原因は、韻律連合 (Reimassoziation)⁵、意味類推 (Bedeutungsanalogie)⁶ 等によって起こると考えられる。これらによって、女性名詞が男性化したり男性名詞が女性化する一方で、男性名詞 *flod*

(=flood)、男性名詞 *comp* (=fight, conflict; Hall の *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (1960) の辞書では、男性若しくは中性名詞)、女性名詞 *ferde* (=army) が中性化されるという事例がある。このような「性変移」が性消失に繋がると、Hoffmann は推測する。

1.2. 下位組織仮説

この性変移仮説は、性の消失に関する有力な理論であるが、これに対して Jones (1988) は、下位組織 (sub-system) 説を唱えた。古英語期において、屈折語尾 *-ne* (男性・対格)、*-re* (女性・与格)、*-um* (男性若しくは中性・与格)、*-(e)s* (男性若しくは中性・属格) は、性・数・格を示していたが、その性区別の能力を失った。そして、対格が与格にも用いられ、主格が全ての格に用いられるような格の下位組織が、後期古英語期や初期中英語期には存在すると主張した⁷。しかし、70% 以上の限定詞が元の性に一致しているという、*-ne*、*-re* を含む限定詞に関する Jones (1988: 173) の研究結果は、Lazamon's *Brut* が性変移の余り進んでいない作品であることを示している。

2. 内在的一致と外在的一致による「ゆれ」

Jones は *-ne*、*-re*、*-um*、*-(e)s* のような限定詞の屈折語尾 (これを内在的一致 (noun phrase internal gender agreement) と称する) だけに関して調査している。唐木田 (1983) は、これに対し、照応による性的一致 (これを外在的一致 (noun phrase external gender agreement) と称する)、つまり、名詞そのものの性と、この名詞に照応する代名詞の性が一致するかどうか、限定詞と代名詞両方の調査が、性消失の研究には必要であると述べている。なぜなら古英語期においては、限定詞と代名詞のどちらも性を有していたからである⁸。唐木田 (1983) によると、*Vices and Virtues* という初期中英語期のテキストの特徴として、本来、女性与格である屈折語尾 *-re* は、女性名詞ではない名詞にも現れると述べている。これは性分類体系の崩壊とも言える。唐木田は、男性名詞 *hope* (=hope) が女性代名詞 *hie*、*hire* によって示される例を挙げている。それに加え、屈折語尾 *-re* を持つ女性の限定詞によって修飾されている例も挙げている。この女性化は、性消失に繋がるものではなく、ラテン語による影響や、擬人化を目的とする女性化現象であると、唐木田は判断している。

Baron (1971: 125-6) は、Jones (1967: 299) がすでに引用している例だが、女性名詞 *burh* (=borough, castle, town) に Hoffmann (1909) の言う「男性化 (masculinisation)」が起きている 2 例と、女性を維持している 1 例を Lazamon's *Brut* の Caligula 版から挙げている。すなわち、前者 2 例においては、女性名詞 *burh* が男性対格を示す語尾 *-ne* を持つ不定冠詞 *enne* (4775)⁹ と、*-e* の欠如した形である定冠詞 *þan* (3073) によって修飾されている。一方、後者は、女性属格・与格を示す語尾 *-re* を持つ不定冠詞 *þere* (149) によって性が表示されている例である。すなわち、男性と女性が一つのテキストの中に混在しているのである。

Baron の指摘 (1971: 120) における欠点は、Lyons、Moravcsik の引用から、名詞とその名詞を修飾する限定詞が、同一名詞句の内在的屈折 (noun phrase internal inflection) によって一致し、名詞とその名詞に照応する代名詞との間には外在的屈折 (noun phrase external

inflection) が生じるとだけ述べて、上記 *burh* 3 例の外在的屈折の調査は行っていないことである。そこで、この 3 例の外在的屈折の調査を加えると、*enne burh* (4775) の例だけにおいて、外在的屈折が 3 人称単数の女性形代名詞 *hire* (4780) によって 2 度示されている。これを図示すれば、以下のようになる。

a	borough	it
[<i>enne</i> ----- <i>burh</i> ----- <i>hire</i>]		
男性不定冠詞 (内在的不一致)	女性名詞	女性人称代名詞 (外在的一致)
(Internal Disagreement)		(External Agreement)

女性名詞 *burh* が同一名詞句内で男性限定詞 *enne* に修飾されるような場合は、内在的屈折の不一致と呼び、この名詞が女性代名詞 *hire* によって示される場合は、外在的一致とする。上例が示すように、内在的、外在的に必ずしも性が一致するわけではない。名詞を修飾する男性の限定詞と、その名詞に照応する女性代名詞の間において、「ゆれ」という現象が起きているのである。このような名詞に照応する人称代名詞 *hine*、*hire* と、それらの代名詞が照応している名詞を修飾する限定詞との関係に焦点をあてて、「ゆれ」を具体的に精査していく。

3. 名詞における性

3.1. 男性名詞における「ゆれ」

男性名詞 *castle* は、男性代名詞 *hine* によって照応されるとき、性は外在的に一致する。そして、この名詞が男性の限定詞 *þene* によって修飾されれば、内在的にも性が一致する。このように内在的にも外在的にも性が一致する例が 22 例ある。

男性名詞の外在的不一致の唯一の例が *tur* (=tower) である。与格の女性代名詞 *hire* による女性化が 1 例見られる。Hoffmann (1909) は、古フランス語由来の名詞 *tur* は、古フランス語の性に合わせ女性化したと述べているが、さらに大きい一連の文脈に範囲を広げ「ゆれ」を確認すると、以下の(1)のように¹⁰、本来男性与格の限定詞 *an-um* (=a, one) が水平化した *an-e* と、男性主格の限定詞 *þe* (=the, that) による内在的一致と、女性与格代名詞 *hire*、女性主格代名詞 *heo* 2 例による外在的不一致により、性の「ゆれ」が起きている。

(1) He hehte wurchen *ane* (M) *tur* (M): wunderliche fæier.

þe (M) *tur* (M) wes muchel and hæh. & þere sæ *heo* (F) stod wel neh.

þe kæisere *hire* (F) ʒæf nome. & Oðeres *heo* (F) cleopede. (3871-3)

He ordered [caused] a tower to be `worked [made] wonderfully fair ;

`the tower [it] was `mickle [very fair] and high, ‘and’ to the sea it stood `well [very] nigh.

The emperor `gave it a name, and called it Otheres [caused it to be called Oðres the noble];

(Madden: 1847)

3.2. 他言語から借用された名詞の性の「ゆれ」

性の「ゆれ」の研究をするにあたっては、さらに次の 2 点についても考慮しなければな

らない。第一に、Lazamon が中英語期以降に入って来た外来の名詞に、男性、女性、中性の何れの性を当てているのかということ、第二に、古英語辞書で2つ以上の性が表示されている名詞が、このテキストにおいてどの性を示しているのかということである。もしこれらの名詞が古英語期と同じ2つ以上の性を持つのであれば、古英語期において既に他の性への「ゆれ」があり、逆に変動がなければ、Lazamon's *Brut* において、これらの名詞の性の「ゆれ」はないということになる。

3.2.1. 古フランス語由来の名詞の性について

前者については、例えば、古フランス語由来の *mahum* (=idol) は、1066年のノルマン人による征服後に現れる名詞で、古フランス語においては男性名詞である¹¹。このテキスト(Lazamon's *Brut*)では、限定詞 *þene* (117) で修飾され、代名詞 *hine* (119) と照応している。いずれも男性を表示する。もしこの名詞が古フランス語の性と同じであると仮定すると、性の「ゆれ」は存在しないことになる。そこで、*hine* (119) に続く代名詞を調査すると、*he* (119)、*hine* (120) のように男性代名詞によって示されている。よって、この名詞は男性であると考えられる。

(2) Ah heo nom *þene* (M) *mahum* (M): þe heo tolden for godd.

þe Eneas mid his ferde: brohte from Troie.

In Albe Lingue he *hine* (M) sette: ah sone *he* (M) þonene iuatte.

forð azein mid þan winde: þe Feond *hine* (M) ferede. (117-20)

But he took the idol, 'that they accounted for God',

that Eneas 'with his army' brought from Troy ;

in Alba Longa 'he' set it, but soon it thence went;

'forth' back with the wind the Fiend conveyed it. (Madden: 1847)

3.2.2. 2つ以上の性を表示する名詞

古英語辞書では男性若しくは女性名詞である *hul* (=hill) の3例は、男性の限定詞 *ænne*、*an-*、*þan* と、男性代名詞 *hine* と一致し、Hoffmann (1909: 65) も、男性の限定詞 *ane*、*þene*、*þissen* (=this) によって示される例を挙げているように、この作品において *hul* は男性名詞であると考えられる。

e.g. [on *ænne*(M) *hul*(M/F)(824)—*hine*(M)(825)], [*an*(M)-*oðer hul*(M/F)(12844)

—*hine*(M)(12844)], [*þan*(M) *hulle*(M/F)(13048)—*hine*(M)(13049)]

これと同じような現象が男性若しくは女性名詞 *sæ* にも見られ、この作品においては女性名詞であると考えられる。

e.g. [*þa*(F) *sæ*(M/F)(10991)—*hire*(F)(10992)]

さらに、Kitson (1990) は2つ以上性を持つとされる名詞が各方言において、それぞれ1つの性しか持たないという視点から、各方言の言語地図を作成した。そのKitson (1990: 189-90, 217) の言語地図によると、男性または女性名詞 *hull* (Kitson の地図では *hyll*) は、

Lazamon's *Brut* が書かれた南西中部方言では男性名詞である。また、男性若しくは女性名詞 *sæ* の場合は、残念ながら言語地図がなく、南西中部方言の性については説明されていない。

3.3. 女性名詞における「ゆれ」

女性名詞が女性の限定詞 *þeo*、*þere* と女性代名詞 *hire* の両方で一致する場合、すなわち外在的・内在的屈折の両方が一致する例が 12 例ある。Hoffmann (1909: 59) の「子音語尾で終わる名詞は男性になる。」という理論に基づいて、本来女性名詞である *burh* は、男性でなければならないが、*þeo burh* (5812) の例のように、女性限定詞 *þeo* によって示されているため、この Hoffmann の理論に当てはまらない。

e.g. [*þeo*(F) *burh*(F)(5812)—*hire*(F)(5813)—*hire*(F)(5814)], [for *þere*(F) *seole*(F)(6425)—*hire*(F)(6425)], [*þa*(F) *lazen*(F)(3149)—*hire*(F)(3150)], etc.

※例に挙げられている女性名詞の意味は、*seole* (=soul)、*lazen* (=law)である。

しかし、Hoffmann のもう一つの理論である、女性名詞 *burh* が男性名詞 *castel* (=castle) との意味類推で男性化するという性変移の理論に当てはまるかもしれないが、断定できない点がある。それは、*burh* が外在的・内在的屈折の何れかにおいて男性化する、すなわち「ゆれ」があるということである。次の例は、外在的に一致せず、男性代名詞 *hine* によって男性化している例である。

e.g. [in-to *þare*(F) *burhze*(F)(4865)—*hine*(M)(4866)], [*þæ*(F) *burh*(F)(7106)—*hine*(M)(7108)]

この女性表示から男性表示へ変化する現象は、「性変移」と考えられるが、次の内在的に男性化する例を見ると、男性の限定詞 *anne*、*þe* によって男性化された *burh* が、女性代名詞 *hire* によって本来の性である女性で示されている。つまり局所的な「ゆれ」が起こっているのである。

e.g. [*anne*(M) *burh*(F)(2992)—*hire*(F)(2994)], [*þe*(M) *burh*(F)(7102)—*hire*(F)(7102)]

このように、意味類推によって男性化した後に、女性代名詞 *hire* で照応している理由については、さらに本文を内容的に検討してみても、断定的なことは言えない。

(3) *ane* (M) *burh* (F) *he arerde*.' *muchele* & *mare*.

þa þe (M) *burh* (F) *we[s]* al *zare*.' *þa scop he hire* (F) *nome*.

he hæhte heo (F) *ful iwis*.' *Kaer Carrai. an Bruttisc.* (7101-3)

a *`burgh* [castle] *he areared*, *`mickle and lofty* [fair to behold].

When the burgh was all ready, then *`shaped* [set] he to it a name ;

he named it full truly *Kaer-Carrai* in British, (Madden: 1847)

※*we[s]*の[]内は、編集者の解釈である。

代名詞 *hire* によって元の女性に戻る 2 例に共通して言えることは、*Kæir Usch* (2994)、*Kaer Carrai* (7102) という名前を *burh* に付けたという内容が書かれているということである。(1) の本来男性名詞である *tur* (=tower) の例文における *hire* による女性化の場合も、や

はり、「その塔に名前を付ける」という内容で書かれている。また、男性との「ゆれ」は女性名詞 *burh* においてのみ起こるので、さらに具体的に、この名詞が記載されるすべての箇所について、今後もっと追究しなければならない。

3.4. 男性・中性名詞に照応する *him*

男性名詞の2例と中性名詞2例が、内在的と外在的の両方で本来の性を維持している。

e.g. [*þæne*(M) *stan*(M)(4970)—*him*(M)(4972)], [*ænne*(M) *sel-cuðe sterre*(M)(8914)—*him*(M)(8916)]

e.g. [*þis*(N) *lond*(N)(975)—*hit*(N)(976)—*him*(N)(977)], [*to þissen*(N) *londe*(N)(14674)—*him*(N)(14678)]

本来男性名詞である *stan* (=stone)、*sterre* (=star) は、男性若しくは中性与格の代名詞 *him* によって照応されるとき、性は外在的に一致し、これらの名詞が男性の限定詞 *þæne* (=the, that)、*ænne* (=a, one) によって修飾され、内在的にも性が一致する。また、本来中性名詞である *lond* (=land, country) は、*him* によって照応されるとき、性は外在的に一致し、この名詞が中性の限定詞 *þis* (=this) と、本来男性若しくは中性の限定詞 *þissum* (=this) が変形した形である *þissen* によって修飾されると、内在的にも性が一致する。

しかし、*him* と *þissen* は男性、中性という2つの性を示す代名詞、限定詞であるから、見方を変えると、男性名詞 *stan*、*sterre* が「中性」代名詞 *him* によって中性化している、あるいは、中性名詞 *lond* が「男性」代名詞 *him* によって男性化しているとも考えられる。故に、これら3つの名詞が、他の限定詞や代名詞によって中性化、男性化していないかについて、さらに追及しなければならない。

4. おわりに

名詞に照応する人称代名詞 *hine*、*hire*、*him* とその名詞に付随する限定詞を内在的・外在的に考察した結果は、次のようにまとめることができる。このテキスト *Lazamon's Brut* においては、ほとんどの名詞が本来の性を維持している。男性名詞 *tur* と女性名詞 *burh* の2例(のべ6例)にだけ性の「ゆれ」が見られる。さらに、この2例を対象に調査範囲を広げると、性変移は、本来の性から別の性へ変化し、性変移した後に再び元の性へ戻るといふ、局所的な性変移が観察される。コンテキスト内に本来の性と、別の性が一緒に存在するという事は、性の「ゆれ」が起きていると考えられる。このテキストが語られるために書かれたものであるということを考慮すると、この「ゆれ」は、一人の書き手 *Lazamon* が文学作品の受け手に与える「変調」でもあるともいえよう。さらに作品内容についての研究が必要になる。

tur と *burh* が「その塔に、その町に名前を付ける」という内容になると、なぜ女性代名詞 *hire* で示されなければならないかについては解決していないが、ともかくも女性化する。従って、これら2つの名詞にしか起きない性の「ゆれ」は、性消失につながっていく現象ではなく、性消失に影響を与えたものではないとも考えられる。

性消失に直接的な影響を与えたのは、多くの先行研究者達も主張しているように、屈折語尾の水平化というのが一番大きな理由ではなかろうか。特に、限定詞における屈折語尾は、益々消えていくだろうし、その時、語順の重要性が増すだろうから、統語的研究も必要になる。また、このような屈折語尾を手掛かりとする性消失の研究において、最も難しい点は、Lazamon という書き手が、屈折語尾が混沌としている時代に、屈折語尾 *-ne*、*-re* によって古英語期の性、数、数を記しているにもかかわらず、頭韻、ノルマン・フランス語の影響による行間韻、語順等の影響下で書き、語っていると考えられることである。さらにまた、屈折語尾 *-ne*、*-re* 以外の屈折語尾に関する研究も必要であり、本稿が資料とした MS. Cotton Caligula A. ix の約 50 年後に書かれた MS. Cotton Otho C. xiii では、性変移が広まっているのか、あるいは性のゆれが見られず、性そのものが消失していつているのか、精査し、考察することが今後の課題となろう。

注

- 1 Lazamon's *Brut* はノルマン人の征服から 200 年以上後である 13 世紀前半の南西中部方言の作品であり、Brook & Leslie によって編集された EETS (1963-1978) の校訂本に基づいた MS. Cotton Caligula A. ix と、これより約 50 年後に書かれた MS. Cotton Otho C. xiii の 2 つの版がある。
- 2 英語の時期区分：古英語期 (700-1100)、中英語期 (1100-1500)、近代英語 (1500-1900)、現代英語(1900-)
- 3 古英語期における限定詞と代名詞の曲用は、注の後に付録として挙げた格変化表 (Lass 1992: 112, 117) を参照。*-ne* と *-re* を含む限定詞と 3 人称単数の代名詞は、それぞれ男性と女性を示す。さらに、*hine* は男性を示し、*hire* は女性を示す。
- 4 水平化とは、古英語期に存在した屈折語尾が弱化し、一様化することである。
- 5 韻律連合 (Reimassoziation) とは、本来男性若しくは中性名詞 *frið* と同じ脚韻を踏む名詞であることから、本来中性名詞 *grið* (=peace) が中性だけでなく男性化することである。
- 6 意味類推 (Bedeutungsanalogie) とは、中性名詞 *lond* (=land, country) と同じような意味の女性名詞 *riche* (=realm, territory) が中性化するように、類義の意味によって性の変移することである。
- 7 Jones (1988: 173, 174) の表から、彼独自の格区別の「下位組織」を使用して、古英語期の性と一致する数字だけを取り上げてみよう。男性名詞に一致する限定詞は、(Jones は、与格・対格という区別ではなく、独自の格区別をしているが)、目的格 *þene* が全体の 80% (実数 59 例)、*-e* の無い形の *þan* が 83% (5 例)、*þisne* が 100% (12 例)、*-ne* が 90% (44 例)、*þinne* が 0% (0 例) である。また、女性名詞に一致する限定詞は、所格 *þere* が 73% (37 例)、*-re* 95% が (20 例)、*þissere* が 90% (18 例)、*-ne* が 70% (7 例) である。
- 8 内在的屈折と外在的屈折との関係については、古英語期における性を調べる必要がある

ため、いくつかある古英語辞書の中から Hall (1960) による古英語辞書のみを使用する。

9 () 内は、Brook & Leslie (1963-1978) のテキストの行数を示す。Jones と Baron は、Madden (1847) のテキストの行表示を使用した。本稿では Brook のテキストの行表示に従っている。

10 (1) 以降の例文において、(M) は男性、(F) は女性、(N) は中性の略である。また、本稿の例文では & を用いたが、Brook のテキストでは Tironian sign で記されている。

11 古フランス語の *mahum* (=idol) については、Kurath, H. S., H. Kuhn, and R. E. Lewis (1975: 15) 編集の *The Middle English Dictionary* では、*mahum* は Lazamon's *Brut* の Caligula 版における初例として記載されているが、性の表示はない。Greimas (2004) による古フランス語の辞書では、*mahum* は男性名詞と示されている。

付録

Third Person Pronouns in Old English

	Third person singular		Third person plural	
	Masculine	Neuter	Feminine	(all genders)
Nominative	Hē	hit	hēo	hī(e)
Genitive	His	his	hire	hira/heora
Dative	him	him	hire	him/heom
Accusative	hine	hit	hīe	hī(e)

The Definite Determiners in Old English

	Singular			Plural
	Masculine	Neuter	Feminine	(all genders)
Nominative	sē	þæt	sēo	þā
Genitive	þæ-s	þæ-s	þæ-re	þā-ra
Dative	þæ-m	þæ-m	þæ-re	þæ-m
Accusative	þo-ne	þæt	þā	þā

参考文献

- Baron, Naomi S.: "A Reanalysis of English Grammatical Gender," *Lingua* 27, 1971, 113-140.
- Brook, G. L. and R. F. Leslie, eds.: *Lazamon: Brut*, 2 vols. (250, 277) EETS, London: Oxford UP, 1963, 1978.
- Greimas, A. Julien, ed.: *Dictionnaire de l'Ancien Français*. Paris: Larousse, 2004.
- Hall, J. R. Clark, ed.: *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. 4th ed. Cambridge: Cambridge UP, 1960.

- Hoffmann, Paul: *Das grammatische Genus in Lazamons Brut. Studien zur englischen Philologie* 36, 1909.
- Jones, Charles: "The Grammatical Category of Gender in Early Middle English." *English Studies* 48, 1967, 289-305.
- : *Grammatical Gender in English: 950 to 1250*. London: Croom Helm, 1988.
- Karakida, Shigeaki: "The Grammatical Category of Gender in *Vices and Virtues*: Evidence for Gender Change in Early Middle English." *Studies in English Literature*, 1983, 83-99.
- Kitson, Peter: "On Old English Nouns of More than One Gender." *English Studies* 71, 1990, 185-221.
- Kurath, H. S., H. Kuhn, and R. E. Lewis, eds.: *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1954-2001. (see also <http://www.hti.umich.edu/dict/med/>)
- Lass, Roger: "Phonology and Morphology," *The Cambridge History of the English Language, Volume II: 1066-1476*. Ed. Norman Blake. Cambridge: Cambridge UP, 1992, 23-155.
- Madden, Sir Frederic, ed.: *Lazamon's Brut or Chronicle of Britain*. 3 vols. London: The Society of Antiquaries, 1847.